

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 17 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520149

研究課題名(和文) ポーランドの前衛美術 - 両大戦間期から現代に至る芸術の担う役割について

研究課題名(英文) Avant-garde in Poland

研究代表者

加須屋 明子 (Kasuya, Akiko)

京都市立芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：10231721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：戦時下から冷戦期にかけて、ポーランドの前衛美術の果たした役割について調査し、前衛のルーツとその発展についての本研究のまとめを行い、「ポーランドの前衛」について包括的研究を実施し、芸術が社会とどのように関わっているのかといった点にも注目した。7月にはワルシャワのアダム・ミツキエヴィチ協会の協力を得てワルシャワ近代美術館等において聞き取り調査を実施し、また申請者の所属する国際美学会主催の第19回大会において発表し、研究者との意見交換を行った。また8月以降は本研究のまとめとして報告書の執筆と研究成果の公開に取り組んだ。なお、平成26年度に研究成果公開促進の助成を受け、書籍として刊行の予定である。

研究成果の概要(英文)：I have compiled my research on the origins and development of Polish avant-garde art based on surveys of the role it played in wartime and during the Cold War. Undertaking a comprehensive study of Polish avant-garde art, I have focused on the relationship between art and society, while also considering the function of artists. In order to examine the role of art in socialist nations during the 20th century, I conducted a series of interviews at the Adam Mickiewicz Institute and other facilities in Warsaw in July 2013, gave a presentation at the 19th International Congress of Aesthetics held by IAA, of which I am a member, and exchanged opinions with other researchers. Since August, I have been involved in writing a report and presenting the results of my research publicly. I have received a research grant and am scheduled to publish a book based on my findings in 2014.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ポーランド 前衛 現代美術 東欧

## 様式 C - 19、F - 19、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 報告者(研究代表者:加須屋明子)は1989年から1991年まで、ポーランドのヤギェウォ大学哲学研究科美学研究室に留学してインガルデンを中心とした美学芸術学の研究を行ったほか、同時代の美術状況についての調査も行い、帰国後1991年より2008年3月までは国立国際美術館学芸員として、多くの展覧会を企画して中東欧美術の紹介につとめ、ポーランドからも優れた美術作家を招聘して講演会を開催するなど、ポーランドを中心とする旧東欧地域の芸術状況について継続的に調査研究を続けてきた。本研究は、その成果を生かしながら更に視野を広げることによって、より包括的な研究を行おうとするものであった。

(2) ポーランド美術は長い歴史を背景として、優れた成果を多数生み出し続けている。ところが、特に戦後の冷戦構造にはばまれて、その豊かな成果について情報の流通が遅れ、なかなか西側へ伝わってこなかった経緯を持つ。しかしそれも1989年の東欧革命ならびに2004年のEUへの加盟を経て、徐々にではあるが優れた蓄積が紹介されるようになった。研究者はポーランド近現代美術について、これまで継続的に調査を行っているため、かなり資料は集まっているが、近年になってこれまでになく出版が相次ぎ、新たに入手可能となる資料が多く散見される。そのため、現地に赴いてそうした貴重な資料を調査収集し、必要に応じて複写を行うことが急務である。とりわけポーランドのワルシャワ国立美術館、クラクフ国立美術館の学芸員の協力も得ながら、作品調査ならびに文献収集を実施することが急がれた。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、前項の「動機」でも言及したように、冷戦構造に阻まれて情報が入りづらかったポーランドにおける前衛美術の動向について、歴史的経緯をふまえつつ、最新の現代美術の状況に至るまでそれがどのように展開しているのかを検証することが目的である。すなわち、戦時下および冷戦期において、ポーランドの前衛美術の果たした役割について考察することを目的とする。

(2) ポーランドの前衛美術について、断片的な紹介はあるものの、まだ全体としての総合的研究は日本で着手されていない。そのため、本研究においてはポーランドの近現代美術における重要な流れを形成する、前衛美術の動向について調査を行い、またそれが複雑な社会背景や政治とどのように関わっていたのかを考察する。現在の状況についても分析を行うことにより、芸術の担う役割とこれからの可能性について検討する。そのことによってポーランド文化研究に対して貢献すると同時に、旧東欧地域において芸術作品がどのような役割を担ってきたのか、現在それがどのように受け継がれているかを明らかにし、周辺の地域研究へと繋げることを目指す。

(3) 旧東欧地域の情報は第二次世界大戦後の冷戦時代の、いわゆる「鉄のカーテン」などによる情報の遮断された状態が長く続いたことの弊害が未だ残っており、流通しづらい状況に置かれている。そのため

に、西欧中心の美術史記述においては、豊かな旧東欧地域の文化芸術が往々にして欠落したままである。しかしながら、ポーランドをはじめとするこうした地域の複雑な歴史を背景としつつ生み出され、現代へと繋がる独特な文化は研究対象として非常に重要である。戦前から戦後、そして現代に至る美術を「前衛」をキーワードにして繋げることで、芸術作品の担う役割と意義、その構造分析を行うことができ、それはひいては日本における芸術の姿をも明らかにすることへとつながる。

### 2. 研究の方法

(1) 前衛のはじまりとされる両大戦間期から、戦時下、冷戦期、雪どけの時代を経て現代に至るまでを視野に入れ、分裂や占領などを経験しながらも芸術がどのように受け継がれ、また社会においてどのような役割を果たしてきたのかという点に注目した。とりわけ、スタニスワフ・イグナツィ・ヴィトキエヴィチ(ヴィトカツィ)(Stanisław Ignacy Witkiewicz (Witkacy) 1885-1939)、ヴワディスワフ・スツシエミンスキ(Władysław Strzemiński 1893-1952)、タデウシュ・カントル(Tadeusz Kantor 1915-1990)、ミロスワフ・パウカ(Mirosław Bałka, 1958-)、アルトゥール・ジミエフスキ(Artur Żmijewski, 1966-)らの活動を取り上げ、作品について調査研究を続ける中で、ポーランドの前衛美術の独自の展開と、政治的な背景との関わりについても考察した。

(2) ポーランドの前衛の出発点として位置づけているヴィトカツィは画家、写真家、脚本家、小説家、美術理論家、批評家ならびに哲学者として、クラクフを中心として多彩な活動を展開した非常に重要な人物であった。ヴィトカツィは1919年に『絵画における新しい形式』を発表し、「純粹形式」美学理論を打ち立てたことでも知られ、また1925年頃から開始された「肖像画協会」はユニークな活動として注目される。諧謔とユーモアに満ちたこの活動は、芸術家の役割を社会的な実践へと引き戻す意義深いものであった。彼と親交の深かったレオン・フフィステク(Leon Chwistek 1884-1944)は画家、数学者、哲学者、美学者としても名高く、1917年にはクラクフを中心に「ポーランド表現主義者たち Ekspresjaniści polscy」グループを立ち上げ、1919年には「フォルミシチ」と改名、その中心的な理論家となった。雑誌「フォルミシチ」に掲載した彼の論文、「芸術における現実の複数性について"Wielość rzeczywistości w sztuce」(1918)や「現実の複数性について"Wielość rzeczywistości」(1921)において、フフィステクは現実を4つの型に分類している。すなわち、一般的現実、物理的現実、感覚的現実、そして構想的現実。これらは、視覚芸術において、それぞれ対応する様式がある。順に、プリミティヴィズム、リアリズム、印象派、未来派、である。

フフィステクはフォーミズムを発展させた、ストレフィズム（区画主義）理論を構築し、抽象絵画における様々な構成方法の基礎を形成した。区画は線によって区切られるのではなく、形や色の構成によって区切られ組み合わせられる。フフィステクは従来の伝統的で安定した概念や空疎な抽象表現に反発し、創造的自発性を提唱した。

(3)ポーランド南部のこうした動きとは別に、ワルシャワを中心とした北部において、両大戦間期、とりわけ1923年から1933年にかけての10年間の前衛美術シーンを率いたのが、ヴワディスワフ・スツシエミンスキ（Władysław Strzemiński 1893-1952）、カタジーナ・コプロ（Katarzyna Kobro 1898-1951）、ヘンリク・スタジェフスキ（Henryk Stażewski 1894-1988）らである。彼らは構成主義者として前衛を提唱し、時代を切り開いた優れた作家たちであった。スツシエミンスキは1926年からウッチ、ブジェジーナ、コルシュカと移り住み、1931年から以後は、ウッチにて1952年に没するまで積極的な制作活動を続ける。彼はロシア構成主義の、客観的な法則に従いつつ厳密に構成された平面を高く評価し、ポーランドにおいても構成主義を広めることに力を尽くした。1924年に「ブロック」という名前の芸術家集団を結成し、3月に同名の雑誌を発行する。同誌は1926年3月までに11号を発行し、グループの主要メンバーであったスツシエミンスキ、スタジェフスキ、ミエチスワフ・シュチュカらの論考の他、マレーヴィチやエル・リシツキーらの文章を翻訳して掲載している。ポーランドの作家ばかりでなく、多くの外国の作品図版も掲載し、また写真機など最新の技術や機械の紹介も行った。彼らの主張は、シュチュカの手によるマニフェスト「構成主義とは何か」（*Blok* no.6-7 1924）に、よく示されているだろう。構成主義とは、硬直した形式主義に陥ることなく、流動的なダイナミズムの力学を孕み、新技術や機械を取り入れながら作品制作を行うための、実践的な理論であった。集団での形成も重視し、建築の分野でも野心的な試みが続いた。当時ヨーロッパにおいて優勢であった三つの動き、すなわちキュビズム、シュプレマティズム、新造形主義と関連を持つこのプログラムは、ポーランドにおいて抽象美術の原則の構築という成果を生み出した。

(4)ポーランドは18世紀にはロシア、プロシア、オーストリアという三国によって分割され、第一次世界大戦後の1918年に一旦独立を果たすも、1939年、ドイツ軍のポーランド侵攻により第二次世界大戦後が勃発して、再び国家が消滅。その後第二次世界大戦後に独立したとはいえ、実質的にはソ連共産主義の支配下にあった。特に冷戦下において、社会主義リアリズムが唯一公式の美術として政府から認められていた時代にも、芸術家たちは独自の活動を続けようと様々な工夫を凝らし、検閲をくぐり抜け

て作品の発表を試みていた。ポーランド各地で行われたこうした前衛美術運動については、これまであまり取り上げられることがなかったものの、芸術の担う役割を考える上で非常に重要であると考えられる。「連帯」運動の全国的な展開を経て、1989年に共産主義から資本主義へと体制が転換してようやく、ポーランドが独立、復活し、更に2004年にはEUに加盟して、政治的経済的に大きな地殻変動を蒙りつつ現在に至る。2005年に国立国際美術館で開催した「転換期の作法」では、そうした大きな変化の起こった89年以降、現在に至るまでの旧東欧地域、現在では中央ヨーロッパと呼ばれることも多いこの地域の現代美術、とりわけポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーという4国の90年代以降の現代美術を取り上げた。本展覧会については、2006年秋に第一回西洋美術振興財団学術賞を受賞し、その意義が公にも認められた。89年以降に、人も物も流通が一斉に行われ、大量の情報の交流が見られたドラマティックな変換期、その大波がやや静まって、それ新しい世代が活躍を始めた90年代以降と、ポーランドの現代美術は大きな変化を幾度も蒙っている。ミロスワフ・パウカは1958年ワルシャワ生まれ、ワルシャワ美術アカデミーの彫刻科を卒業して1985年から作家としての活動を開始、即ち政権が交代する以前より作品の制作と発表とを続け、国際的にも高く認められて現在に至る世代である。一方のジミエフスキはそれに遅れること約10年、1966年ワルシャワ生まれ、1995年にワルシャワ美術アカデミー彫刻科を卒業して作家活動を開始している。この10年の違いは大きく世代を分けているように思われる。こうした同時代の作家たちが、1989年の東欧革命の影響をどのように受け止め、作風が変化してゆくかという点についても着目しつつ研究を進める。

#### 4. 研究成果

(1)平成21年度には両大戦間期におけるポーランドの前衛、中でも、ヴィトカツィの活動に注目しながら、彼の「肖像画協会」活動及びその周辺について調査研究を行い、また日本美術のコレクターであり、かつ「若きポーランド」の作家たちのよき理解者でパトロンの役割も果たしたフェリクス・ヤシェンスキのコレクションには、20世紀初頭のクラクフを中心とした作家たちの重要な作品が数多く含まれているため、クラクフ国立美術館において、このヤシェンスキ・コレクションを中心とする作品の調査を進め、研究者との意見交換も実施した。平成21年度はヴェネチア・ビエンナーレ開催の年でもあり、近年国際展に参加するポーランド作家の比率が高まっていることから、ポーランド館および企画展示についても調査を実施した。

国内では、東京外国語大学ポーランド文化研究室の関口時正教授並びに神奈川県立近代美術館の水沢

勉氏に研究協力を依頼し、資料の閲覧ならびに意見交換を行うと共に、ポーランドのアニメーション上映会「ボラニメ!」も、東京外国語大学と京都精華大学ならびに研究代表者の所属する京都市立芸術大学の共催で開催した。

(2)平成 22 年度はワルシャワやウッチにおける前衛美術の状況について調査し、スツシェミンスキ、コプロら構成主義者について研究を進めた。両大戦間期の前衛作家たちは国際的な繋がりを密にし、互いに情報交換を行っている。こうした旧東欧諸国の文化状況の特質にも注目し、またポーランドからリトアニアにかけて調査を行い、かつて文化的交流が緊密であった場所の歴史的背景についても考察を行った。ウッチ国立美術館館長、ブンケル・シュトゥーキ現代美術ギャラリーの館長にも協力を依頼し、資料を収集した。ウッチ国立美術館には優れた近現代美術のコレクションがあり、また資料も豊富であることから、これを参照しつつ、新たに建設されるウッチ国立美術館現代部門のコレクションや展覧会企画の動向についても引き続き調査を行った。ブンケル・シュトゥーキ現代美術ギャラリーでは、以前申請者の勤務していた国立国際美術館との交流展を開催した実績もあり、以後も相互の交流が続いているため、今後の交流展実現の可能性についても引き続き候補作家を挙げつつ検討した。

国内では、東京外国語大学ポーランド文化研究室並びに神奈川県立近代美術館等の施設において資料の閲覧ならびに意見交換を行った。北京で開催された国際美学会と京都で開かれた比較文明学会にてポーランド現代美術に関する発表を行い、意見交換を実施した。

(3)平成 23 年 5 月にヤギェウォ大学(クラクフ、ポーランド)にて行われた日本ポーランド美学会に出席してポーランドと日本の現代美術についての発表を行い、研究者と討議をすると同時に、クラクフにオープンした現代美術館館長のマーシャ・ポトツカ氏と面談して意見交換を実施、ヴロツワフの WRO メディアアートセンター主任学芸員のピョートル・クラエフスキ氏とも意見交換を行うと同時に資料の収集を行った。7 月には日本美術技術博物館(クラクフ)にて須田悦弘の展覧会を開催して学芸員や専門家や作家と日本及びポーランドの現代美術について討議し、またヴェネチア・ビエンナーレにおいてポーランドを含めた旧東欧圏の作家たちが現在どのような位置付けにあるかを確認した。また 8 月には横浜にてクシシュトフ・ヴォディチコを招いてのシンポジウム「戦争とアート」に参加して展示を実施、11 月には東京にて日本およびポーランドの作家、学芸員、研究者を交えたシンポジウムを行い、関連する作家や学芸員たちとポーランドの前衛とその継承、社会において果たす役割について討議を行った。3 月には京都市立芸術大学ギャラリー・アクアと Yumiko Chiba Viewing Room(新宿)にて、ドミニク・レイマン個展「遠くて、近すぎる」を実施し、東北大地震後の日本において作品を発表することの意味とポーランド美術の特質について作家と対談を行った。東京

外国語大学ポーランド文化研究室の関口時正教授並びに神奈川県立近代美術館館長の水沢勉氏、大阪大学の囀府寺司教授、埼玉大学の井口壽乃教授にも協力を依頼し、資料収集につとめた。

(4)平成 24 年 5 月にヤギェウォ大学(クラクフ、ポーランド)にて行われた日本ポーランド美学会に出席してポーランドと日本の現代美術についての発表を行い、研究者と討議をすると同時に、クラクフにオープンした現代美術館館長のマーシャ・ポトツカ氏と面談して意見交換を実施、ヴロツワフの WRO メディアアートセンター主任学芸員のピョートル・クラエフスキ氏とも意見交換を行うと同時に資料の収集を行った。7 月には日本美術技術博物館(クラクフ)にて須田悦弘の展覧会を開催して学芸員や専門家や作家と日本及びポーランドの現代美術について討議し、またヴェネチア・ビエンナーレにおいてポーランドを含めた旧東欧圏の作家たちが現在どのような位置付けにあるかを確認した。また 8 月には横浜にてクシシュトフ・ヴォディチコを招いてのシンポジウム「戦争とアート」に参加して展示を実施、11 月には東京にて日本およびポーランドの作家、学芸員、研究者を交えたシンポジウムを行い、関連する作家や学芸員たちとポーランドの前衛とその継承、社会において果たす役割について討議を行った。3 月には京都市立芸術大学ギャラリー・アクアと Yumiko Chiba Viewing Room(新宿)にて、ドミニク・レイマン個展「遠くて、近すぎる」を実施し、東北大地震後の日本において作品を発表することの意味とポーランド美術の特質について作家と対談を行った。東京外国語大学ポーランド文化研究室の関口時正教授並びに神奈川県立近代美術館館長の水沢勉氏、大阪大学の囀府寺司教授、埼玉大学の井口壽乃教授にも協力を依頼し、資料収集につとめた。

(5)平成 25 年度は、7 月にヤギェウォ大学にて開催された第 19 回国際美学会において発表を行い、また 2011 年 3 月 11 年以降の美術と批評の可能性についてパネルを構成し、議論を行った。11 月には「龍野アートプロジェクト 2012 刻の記憶 Arts and Memories」を開催してポーランドの現代美術作家、ミロスワフ・パウカの作品を展示し、日本とポーランドの交流に努めるとともに、その作品の意義について考察を行い、2014 年 2 月に報告書を発行した。また、2013 年 12 月には、研究者の所属する京都市立芸術大学ギャラリー・アクアにて「存在へのアプローチ-暗闇、永遠、日常- ポーランド現代美術展」を InSitu 財団との共催で実施し、ポーランド戦後美術の流れを概観できる日本初の機会を提供し、更にオープニングトークやパフォーマンスのアフタートークなどにて、ポーランド美術と日本との関わりについても議論を行った。更にまた、本研究の成果に基づいて、平成 26 年度には『ポーランドの前衛』を創元社より出版が確定している。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)  
〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. Akiko Kasuya 'The Role of Art in the 21st

Century: Polish Contemporary Art ' *Aesthetics* 査読有 No.16 (April 2012) pp.25-35  
[http://www.bigakukai.jp/aesthetics\\_online/aesthetics\\_16/no.16\\_top.html](http://www.bigakukai.jp/aesthetics_online/aesthetics_16/no.16_top.html)

2. 加須屋明子 「冷戦期におけるポーランド美術の果たした役割--全体主義と民主主義の狭間で」『鹿島美術財団年報 2008 年度版, 26』鹿島美術財団 / 鹿島美術財団 [編] 2009.11. pp.11-20

〔学会発表〕(計 16 件)

1. 加須屋明子 (コメンテーター) 「周縁の近代: 東欧と日本の美術」国際シンポジウム 2014.2.28, 岡山大学
2. Akiko Kasuya (chair) "Applied Social Art: The Potential of Art and Criticism after March 11, 2011" panel, The 19<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, 2013.6.24, Jagiellonian University, Krakow, Poland
3. Akiko Kasuya "Amateurism in Art: The Revolt of the Everyday" The 19<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, 2013.6.26, Jagiellonian University, Krakow, Poland
4. 加須屋明子 (司会) 「油彩への衝動」国際シンポジウム、第66回美術史学会全国大会、2013.5.11、関西大学
5. 加須屋明子 (パネリスト) 「第三回メディア芸術コンベンション 異種混交的文化における批評の可能性」2013.2.16、政策研究大学院大学
6. 加須屋明子 (パネリスト) 「アートにおけるアマチュアリズム」シンポジウム、美学会西部会例会、2012.6.2、九州大学
7. 加須屋明子 「21 世紀の芸術家の担う役割について - K. ヴォディチコの活動から見えること」民族芸術学会第 124 回研究例会 (音楽学会西日本支部 第 5 回 (通算 356 回) 例会と合同) 2011.12.10、京都市立芸術大学
8. 加須屋明子 (モデレーター) 「美術館建設中。東京・ワルシャワ」国際シンポジウム、2011.11.14、国立新美術館
9. 加須屋明子 「ポーランドと非・西欧をめぐって~ 視覚芸術を中心に」京都文教大学 人間学研究所・臨床心理学部・健康管理センター共催 シンポジウム 「非・西欧的<わたくし>をめぐって」2011.10.30、京都文教大学
10. 加須屋明子 (パネリスト) ラウンドテーブル 3 「ヴォディチコと“ヒロシマ” - 心の武装解除のために」国際シンポジウム「クシシュトフ・ヴォディチコ アートと戦争」2011.8.8-10 北仲スクール (横浜文化創造都市スクール)
11. Akiko Kasuya "'Overturning' the Everyday: One Aspect of Contemporary Art" *Aesthetics and Cultures*. The 1st Polish-Japanese Meeting: Exchanging Experiences, 2011.5.24, Jagiellonian University,

Krakow, Poland

12. 加須屋明子 「ポーランド現代美術の一樣相」第 28 回比較文明学会「芸術から文明を考える - 収奪文明から還流文明へ」2010.11.28、池坊短期大学
13. Akiko Kasuya "A Study on Some Aspects of Japanese Contemporary Art: 'HANA : A Visual Adventure with Fact Blending into Fiction' Exhibition" International Conference "ART OF JAPAN, JAPANISMS AND POLISH-JAPANESE ART RELATIONS" 2010.10.21, The Polish Society of Oriental Art and The Manggha Museum of Japanese Art and Technology cordially invitation, The Manggha Museum of Japanese Art and Technology in Krakow, Poland
14. Akiko Kasuya "The Role of Art in the 21<sup>st</sup> Century: Polish Contemporary Art" The 18<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, Diversities in Aesthetics, 2010.8.13, University of Beijing, China
15. 加須屋明子 「ポーランドの視覚文化にみるポリテイクス」第 7 回 デザイン史学研究会シンポジウム「写真×プロパガンダ×デザイン」2009.7.25、埼玉県立近代美術館 2 階講堂
16. 加須屋明子 「カトヴィツェの前衛」地域研究コンソーシアム・次世代ワークショップ「人文学的アプローチによるポーランド地域主義研究 文学・芸術・言語を通して考えるポーランドの周縁地域」主催: 地域研究コンソーシアム (JCAS) / 共催: 北海道大学スラブ研究センター、日本学術振興会「伝統と境 - とどまる力と越え行く流れのインタラクシオン」第 2 グループ「越境と多文化」、東京大学文学部現代文芸論研究室 2009.1.10、東京大学

〔図書〕(計 7 件)

1. 井口壽乃、加須屋明子 『中欧のモダンアート ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー』彩流社、2013、pp.16-55 (総ページ数 185)
2. Akiko Kasuya (ed. Krystyna Wilkowska) "Overturning" the everyday; one aspect of contemporary art' *AESTHETICS AND CULTURES*, universitas, Krakow, Poland, 2013 pp.177-187(232+68 il.)
3. Akiko Kasuya (ed. Agnieszka Kluczevska-Wojcik and Jerzy Malinowski), 'The crack between imagination and symbolism; The exhibition "HANA: the adventure of our vision in interval of reality and a fiction"' *ART OF JAPAN, JAPANISMS AND POLISH-JAPANESE ART RELATIONS*, Polish Institute of World Art Studies & Tako Publishing House, Torun, Poland, 2012, pp.347-351 (363)
4. Akiko Kasuya (ed. Tokimasa Sekiguchi) "Notes on

the Lithuanian Contemporary Art Scene' *From Krakow to Vilnius Report of the 2<sup>nd</sup> International Itinerant Seminar "The Common Heritage of Eastern Borderlands of Europe"*(2010), Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, 2013, pp.17-20 (120)

5. Akiko Kasuya 'Alternative Art Now: From Japan', 'Alternative Art Now: Sztuka Alternatiwa z Japonii' *14<sup>th</sup> Media Art Biennale WRO 2011 Alternative Now*, The WRO Art Center, Wroclaw, Poland, 2012, pp.50-53, 112-114 (128 )

6. 加須屋明子( 囿府寺司、伊東信宏、三谷研爾( 編 )) 「ポーランドのネオ前衛 クシシュトフ・ヴォディチコとその周辺」『叢書コンフリクトの人文学4 コンフリクトのなかの芸術と表現 文化的ダイナミズムの地平』大阪大学出版会, 2012, pp.105-125(372)

7. ミランカ・トーディチ、金子隆一、加須屋明子著、井口壽乃編「ポーランドの視覚文化にみるポリティックス」『写真×プロパガンダ×デザイン』埼玉大学教養部 リベラル・アーツ叢書2 埼玉大学教養学部・文化科学研究科、2010、pp.67-78(78)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

加須屋明子 ( KASUYA Akiko )

京都市立芸術大学美術学部・准教授

研究者番号 : 10231721

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし